

医療関係者による共同記者会見の要旨について

日時	R3. 8. 4 (水)
	19 : 00~19 : 50
場所	愛媛県医師会館

※右から順に、

愛媛県医師会 村上博 会長
愛媛大学医学部附属病院 杉山隆 院長
愛媛県立中央病院 菅政治 院長
松山赤十字病院 横田英介 院長
愛媛大学医学部附属病院 田内久道 感染制御部長

(司会)

ではよろしいでしょうか。それでは、ただいまから会見を始めたいと思います。

本日の内容と出席者は、お手元にお配りしているペーパーのとおりですので、よろしくお願いたします。時間も限られていますので、早速、村上会長からよろしくお願いたします。

(愛媛県医師会・村上会長)

皆さんこんばんは。愛媛県医師会の村上です。お忙しいところお集まりいただきまして、どうもありがとうございました。

今日は、これからコロナの第5波に対峙してくれる、最前線の現場で戦ってくれている先生方の、現場の生の声を知っていただきたいと思って、会見を開かせていただきました。個人的な見解も含めて構わないと思いますので、ご自由に発言いただきたいと思っています。

東京では、緊急事態宣言が出ているのに、街の様子を見ると、いつもと変わらないというような感じがあるんですけど、オリンピックをやっているのにどうして自粛なんかしないといけないのっていう雰囲気が漂っているように思います。そして、これから夏休みが始まり、お盆が来て、人の移動が大きくなります。東京で起こっていることと同じことが、少し遅れて、必ず愛媛県でも起こってくると思います。

愛媛県松山市の大規模PCR、これはモニタリングポストというものですが、繁華街でのPCR検査を見ると、市中蔓延には至っていません。それから皆様もご存じのとおりで、人口あたりの感染者の数は、県庁の発表するプレスリリースでは、47都道府県の中で比較的少ない方、低い方に入っていますね。ただ、このところクラスターの発生が相次

いでいます。松山市のライブハウス、それから小松高校、それから今回はパチンコ店の従業員の皆さん、ということで、これから、増えこそすれ、減りそうな気配はないということで、愛媛県内の医療が逼迫（ひっぱく）するのではないかというふうに心配をしています。

新聞にもありましたように、重症者以外は自宅療養でと、国の方針が変わってきているようですが、私は非常に心配しています。自宅で亡くなる患者さんたちが増えるのではないか、急変時にどう対応するのか、収容する医療機関が、病院が見つからないという事態も起こります。ですので、この政権の方針の変更については、愛媛県としてはそのような対応をしないというものです。できるだけ入院治療を行っていくということで、病院の出口戦略として、後方連携病院や宿泊療養施設をフル稼働することで、入院治療へのアクセスを確保したいというふうに思っています。

1年前、私たち愛媛県は、約120床の即応病床を確保しました。でもこれで足りると思っていたわけですが、第3波、第4波で全く想定以上のことが起こりまして、今は210床、マックスで250床の病床を準備できることになっています。

ただ、治療や看護、介護はベッドがするものではなくて、人間がするものです。スタッフは相当疲労しています。「頑張れ、頑張れ」と言っても、いつまで頑張ればいいのか、先が見えない中で疲労、疲弊していつているようです。ただ、現場の先生方、看護師さんたちは疲弊が強い中でも、不平を言わず黙々と医療提供に取り組んでくださっています。私としても、すごく感謝をしなければいけないというふうに思っています。

それが概観なんですけれども、まず、愛媛大学医学部附属病院長の杉山先生から、主に重症患者さんを診ていただいているのですが、東京の様子、あるいは愛媛大学の様子など、是非、ご紹介をお願いします。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

愛媛大学の杉山です。

現在、第5波に突入しているという状況です。愛媛大学医学部附属病院は特に重症の患者さんに対応するという役割がございまして、昨日の時点で、第5波に入りまして約200名ぐらいの感染者が出ておりますが、そのうちの4人が重症者です。その4人の方を愛媛大学医学部附属病院で対応しております。

そうしますと200分の4ですから50人に1人が重症になられるわけです。皆さんご存じのように、昨日も今日も30人強の感染者が出ているわけです。そういう形で陽性者が出てきますと、1日半で1人重症者が出てくるわけです。そうしますと、重症の患者さんが少しずつ増えて、一気に医療が逼迫してくるわけです。

なぜ逼迫するかと言いますと、重症の患者さんが入りますと、当院も他の手術の患者さんとか、救急の患者さんとか、そういう方への対応は取れなくなるわけです。第4波の時も手術を通常の40%キャンセルしていたわけです。ですから、そういうことがも

う今まさに起ころうとしているわけです。看護体制も医師の体制も、重症のコロナ患者さんの病棟に人が要りますから、そこに移動すると他の病棟の人がいなくなる。当然、そういう形で他のところの入院や手術が減るということです。

一般の方、救急の方の対応がしっかり取れなくなる。それを、県立中央病院、日赤病院でお世話にならないといけません、県立中央病院も日赤病院も中等症のコロナの方も対応されていますので、全体的に逼迫してくるわけです。そういうことが、既に東京では起こっているということでございます。そういうことで、医療の現場は、やっと第4波が落ち着いて、重症の患者さんが退院されて、さあやっとゼロになるかと言って、これで2週間も経たずに、また重症の患者が入って来られたということですけど、大変な状況になりつつあります。そういう中で何をすればいいのかというのは、やっぱり大切だと思います。

結局、第4波の時も4月の終わりに、こういう共同記者会見を開いていただきまして、県民の皆さんにメッセージとして、とにかく感染予防対策を徹底していただく、感染者をより減らすことが、結局は中等症の人を減らす、重症の人を減らす、そして死亡者を減らすということで、それがとても大切なんだと申し上げたわけですが、今回も再度それを強調させていただきたいと思います。

加えてワクチン接種ですが、まだ県下、30パーセントぐらいの接種率ですね。この第5波が来る時には、もうちょっとワクチン接種が浸透していければなという状況ですが、残念ながら、そこまで行き渡らない間に第5波が来てますので、感染がどんどんまだ広がっていくという可能性がありますので、それを予防するために、基本的な人流を減らすとか、特に、県外への移動だとか、それから盆も迫っておりますので、移動には十分に気を付けていただく。特に、東京近辺ですね、関東、それから関西も増えていきますし、岡山、広島も増えていきますし、そういうことで行動には十分に注意していただくことが大事だと考えております。以上です。

(愛媛県医師会・村上市長)

ありがとうございました。それでは愛媛県立中央病院の菅院長先生お願いします。

(県立中央病院・菅院長)

愛媛県立中央病院の菅です。愛媛県立中央病院の現状をお話しします。

当院は中等症以下のコロナ患者の入院治療を受けるほか、救急とか周産期医療を受け持っておりますので、手のかかる最重症は愛媛大学の方にメインでお願いはしているんですけども、重症患者さんも愛媛大学と協力して受け持っております。

当院の使命として、もちろん救急医療であるとか、お産である周産期医療ですね、そういうのをやはり県内の中心として維持していくという使命はあるんですけども、2021年3月末からのアルファ株主体の第4波、あの時に非常に患者さんが急増しまし

た。それで、その時に病床が足りなくなるんじゃないかということで、一般病床あるいは集中治療室の治療するベッドも増やしました。

そのように対応はしていたんですけども、先ほど杉山院長先生も言われたように、ベッドを確保しただけで治療ができるわけではないので、通常の医療より、かなりの人員を1人の患者さんに対して要します。そのために、例えば、普通の病棟、一般の病棟から看護師さんを移動してもらう。しかも、集中治療室であるならば、その経験のある、スキルのある看護師さんを選ばないといけないという形になってきます。

ですから病院の機能としては非常に痛い。大事な部分っていうのが、どんどん戦力をそこにつぎ込まないといけないというのがありまして、一般診療であるとか、手術であるとか、第4波の際には、病院自体を3割、診療機能を全て落としてください、その分、救急であるとか、周産期であるとか、あるいはどうしても治療しないといけない患者さんは、是非とも守るけれども、やはりちょっと待てるような患者さんには、ちょっと待っていただくという苦渋の選択をしながら、3割の診療機能を落とし、ちょっと患者さんの落ち着いてくる6月中旬ぐらいまでそのような状況でやっていました。その間、手術の予定であった方に、急にキャンセル、申し訳ないけど延ばしてくださいっていうふうな形で、手術の枠が入れられないのでお願いしますという、職員も非常に大変な中、電話し、また患者さんやご家族にも迷惑をおかけしました。

やっと6月中旬から、その分、ご迷惑をおかけした部分というのを取り戻して、一般の診療っていうのをどんどん加速して、今度はやろうとしていた最中に、7月からのデルタ株による第5波というのが始まってしまいました。

感染力だけでいうと第4波のアルファ株より、やはり遥かに感染力が強い。あるいは、一気に家族であるとか、職場であるとか、大量の患者さんが発生するという、この感染力の強さは、やはり第4波とも違うように思っております。ここ2日ほど30人を超える患者さんも出ておりますし、一般病床も徐々に埋まってきております。うちの方も重症病床の患者さんを入れて治療するような状況っていうのも始まりました。第5波はこのまま続けば、早晩、割とかなり早い時期に病床の逼迫っていうか、それは当院だけでなく、おそらく愛媛県内全体で病床の逼迫っていうのが起こってくると思います。

先ほど、皆様言われているように、我々が、医療者側ができることっていうのも正直限られています。患者さんが来たら、その方をできるだけ治療してあげたいと思います。だけど実際にマンパワーなり、施設に制限がある以上、全て受け入れて治療するっていうことができない。だから自宅療養者が増えるとか、いろいろありますけど、ある種、選択っていうのが始まってくるのは、実際に日本中そういう状況になってくるだろうし、愛媛も、村上会長もなるべく治療してあげたいとは言いましたが、そういう状況というのが、早晩、起こってくるのではないかというふうなことを非常に危惧しております。

皆様方へお願いは2点です。

三密を避けるとかマスクをするとか、手洗いをするとか、これは本当に当たり前で、

この1年半、皆さんもすごいちやんとしていただいたかと思います。その上で、飲食であるとか、あるいは移動制限であるとか、これも従来と同じような感覚でやっているとか、やはり今回の第5波は、非常に大量の患者さんの発生というのにつながると思います。もう辛抱してくださいというのは、非常に心苦しいですけども、それしかお願いするとか、我々が皆さんにさせていただくことはきつくないし、それが患者数を減らす非常に良い方法であるのもわかっています。是非そういうふうな行動の抑制というのをお願いしたいということ。

それから、やはりワクチン接種が進んでいて、ワクチンの効果というのは非常にあるように臨床の現場から見ても思います。あとで、また田内先生の方からご報告あると思いますけれども、やはり感染を阻止する力であるとか、あるいは感染した時の重症化を予防する効果であるとか、そういうものは、このワクチンには確かにあります。ワクチンを打つことによって、家族を守り、あるいは身近な人たちを守り、あるいは県民全体、医療も含めて、それを守ることにつながる。県民の皆さんにさせていただける一番有効な手段というのは、ワクチン接種に、是非、早い段階で参加していただくことだと思っております。打てる数に限りがあるという話もありますけれども、打てるチャンスがある時は、是非、早めに参加して、ワクチンを打っていただきたいと思います。私からのお願いは以上になります。

(愛媛県医師会・村上会長)

ありがとうございます。それでは続きまして松山赤十字病院の横田院長先生お願いします。

(松山赤十字病院・横田院長)

松山赤十字病院の横田です。

当院も重点医療機関としてコロナの患者さんの受入れをずっとやっておりました。役割分担の中では、今お話しがあった愛媛大学、県立中央病院が重症患者さんを診ていただく中で、当院は中等症以下の患者を受け入れるということで、やっていたわけですけども、ご存知のように第4波のところで、非常に重症病床が逼迫したということで、4月の28日から当院でも重症病床を2床準備して備えておりました。幸い、第4波の時には、当院で重症を受け入れるところまではいかずに、何とか第4波収束に向かったわけですけど、その後6月末から7月にかけて2週間ほどコロナの入院患者さんがゼロという日が続いておりましたが、10日過ぎから再度コロナの患者さんが増えてきたわけです。

今回の、まだこの2、3週のところでですけども、本日までに、大体の数字としては37人の入院患者を受け入れておりますけれども、感覚的にと言いますか、明らかに違うのは、その中で高齢者は70代の方が1人だけということです。一方、また中等症で

も酸素投与が必要な人というのは、実は3人ということ。ただそのうちの1人は、愛媛大学の方に重症ということで転院しておりますが、多くの方は軽症、こういうところで、高齢の患者とかあるいは重症患者の減少というのは、明らかにワクチンの効果が出ているということを現場としても感じているわけですけど、一方では、今もお話あったように変異株の影響で、非常に感染力が強いということで、今が患者の急増、昨日、今日30人、30人というのは、今までになかった患者の増加というふうに感じているわけで、こうなってきますと、当然、今後は、高齢者以外でも重症患者がどんどん増えてくるというのが懸念される場所です。

これまでは、当院の場合、先ほども申し上げたように中等症以下の対応ということで、基本的にコロナ以外の一般診療、当院の場合は2次の救急の輪番とかありますので、そういったところを含めて、基本的には診療を制限せずに何とかここまでしていたところでした。ただ、ご存知のように、日赤はこの3月に新病院がオープンしました。その際に、病床数が50床減っております。そういった中でコロナの対応もしているということで、既に今の段階でコロナの病床を除いた部分の病床の状況というのは、ほぼ満床で来ているような状況に、既になっております。こういった中で、コロナの対応というのも既にギリギリのところまで来ているというようなところですので、何とかこれ以上の拡大というのは抑えないと厳しくなるんじゃないのかなというのを肌で感じているところでした。

そういった中では、もう既に言われているので、繰り返すことは避けられますけれども、とにかく感染者を抑えるということになれば、繰り返し言われている日常生活のこともありますし、この後、お話出ると思いますワクチンの効果ってというのは、先ほども申し上げましたように、高齢者に対して確実に出てきているということは、わかっていますので、そういった面を、更に一般の方、これから進んでいく世代の方にも対応していただければと思っていますところでした。私からは以上です。

(愛媛県医師会・村上市長)

ありがとうございます。それでは、愛媛大学の感染制御部長をされておられます田内先生お願いします。

(愛媛大学医学部附属病院・田内感染制御部長)

はい、愛媛大学附属病院の田内でございます。よろしく申し上げます。

私からは、愛媛県の新型コロナウイルス感染症の現状と今後の注意点、ワクチンも含めてについてお話しさせていただきます。

ご承知の通り、愛媛県では、第5波と呼ばれている患者さんが7月上旬から少しずつ見られるようになって、今週からはその傾向が明らかになったところでした。愛媛県において現在検出されているウイルスは、もう大部分がデルタ型になっております。デルタ

型が、感染力、重症度とも強力であると言われておりますため、今後の感染対策は本当に重要になってくるというふうに思っております。現在の愛媛県の感染経路を見て参りますと、愛媛県外からの持ち込み、家庭内感染、職場感染、それから一部飲食というような状況になっています。

まず家庭内ですが、1回このウイルスが家庭内に持ち込まれた場合には、家庭内への広がり止めるとするのは至難の業です。ご承知の通り、家庭内は、非常に密接に、環境も共有して生活しておりますので、止めようがないんです。ともかく、家庭内に持ち込まない、これが一番しなければいけない努力ではないかと思えます。

今の状況でウイルスの拡大をコントロールすることができるのであれば、1つは県外からの持ち込みを抑制していただきたいということ、それから、今回、職場で度々出ておりますので、職場での感染防止というのが大事になると思えます。

ですので、関東や大阪などの流行地との行き来を極力控えていただきたいと思えます。現在の関東地域の流行状況は、明らかにですね、今までと状況が違うレベルというふうには言わざるをえません。ものすごく大変なことが起こっています。

それから、職場の感染対策ですけれども、それぞれの職場、お客さんに見えるところとか、外から見えるところの感染対策は、おそらく皆さん十分されていると思えますが、いわゆるバックヤード、控室とか休憩室、それから更衣室など、そういうところでの広がりが想定されます。ですので、控室とか休憩室で集まって飲食をしていないとか、更衣室が密になっていないとか、職場の環境がきちんと整備されているかというのをもう一回ご確認いただきたいと思えます。

東京の緊急事態宣言は4回目で、期間も長期となり、実際の話、自粛による感染対策は大きく期待できないような状況になっていると思えます。自粛というのは、これはどういうことかと言うと、社会全体で弱い人を守るという考え方ですけれども、東京のような状況では、社会に感染対策をお願いするというような状況ではなくなっていて、もう自分の身は自分で守らなければいけないというような状況になっています。ですので、特に感染すると重症化、死亡するリスクのある基礎疾患のある人や、中高年の人、またこれらのリスクがある人と同居をしている人などは、感染しないように十分に注意をしてください。また若い人でも感染すると大変な思いをします。かなりしんどい思いを皆さんしています。それと、試験とか、大会、コンクールを控えている人は、誰かが感染するとメンバー全員が参加できなくなる可能性があります。繰り返しになりますけれども、自粛による感染対策が有効性を失ってきていますので、自分の身は自分で守るといふ、そういう意識が重要だと思えます。

ただ、注意点はあまり変わりません。緊急事態宣言や感染拡大地域との往来は控えていただきたい。それから、職場では、バックヤードのマスクの着用や手指消毒、環境の清掃、密にならないかを確認していただきたい。それから、できるだけ、行かなくてもいい人込みは避けていただきたいと思っております。それから、体調の悪い時は、出勤や

登校をせず、医療機関を受診していただきたいということです。

会食に関しましても、いろいろ状況を選んでやっていただきたいと思いますが、一緒に生活をしているご家族と感染対策をきちんとやっているお店で食事を楽しんでいただくということに関しては、あまりリスクはないと思いますので、ご注意をいただいたらと思います。

ワクチン接種に関してですが、ワクチン接種は本当に有効な感染対策です。有効率がデルタ株で少し低いと言われても 90%前後の有効率を出しておりますので、非常に有効な感染防止をする手段になります。ただ、ワクチンさえしていれば絶対に感染しないというわけではありませんが、マスクや手洗いと並行して、ワクチン接種をもう1つそこに加えると、今まで以上に感染から守られます。

もちろん、接種は医療行為ですので、打つか打たないかは個人の意思に任されます。接種も多数しておりますので、一定数は発熱や筋肉痛等の副反応は見られますが、ワクチンを接種することによって、高率に感染しにくくなるという大きなメリットを持っています。このワクチンは、ワクチンを受けた人が得をするワクチンです。社会のためにワクチンをするという意識じゃなくて、ワクチンをした人が得をする、ですからワクチンをしてくださいねとおすすめしたいと思っています。

SNS 上には、明らかに誤ったワクチンに関する情報が、たくさん溢れています。正しい情報は、厚生労働省のホームページ、発信する情報に責任のあるメディア、新聞、テレビ等の情報を参考にしていきたいというふうに思っております。

ワクチンに関しては、潤沢に供給がされているわけではありませんので、順番がありますので、すぐに皆さん受けに行ってくださいと言っても、なかなか、まだ受けられないんだと言われるかもしれませんが、きちんと順番が回ってきたら、是非その時にはワクチンを受けていただきたいとお願いしたいと思います。私からは以上になります。

(愛媛県医師会・村上会長)

ありがとうございました。あとでご質問をお受けしたいというふうに思います。

私から少し断片的な雑感になりますけれども、こういう会見では余計なことを言うなというふうにいつも言われるのですが、この際ですから、本音を少しお話しします。

一時、ワクチンの打ち手不足だというふうに私たちが批判をされました。あちこち頼んで、いろいろな開業の先生、勤務の先生に応援をいただいて、打ち手はもう十分そろっています。むしろ打ち手は余っています、今、ワクチンが、来ない。何とか頑張って、政府にはワクチンを獲得していただきたいなと思っています。

それから、デルタ株というのは、非常に怖いと思うんです。今まで以上に感染力が強く、コロナにかかった人はもちろんですが、コロナにかかっていない市民の人まで蝕んでいっているような感じがします。家の中でも、ソーシャルディスタンスを保ちなさい、あるいは家の中でもマスクしろ、食事は別々に。これは笑い話かもしれませんが、

本当にそういうことが必要になってくるのかもしれませんが。心配しています。

それから、今の状況が続いていって、さらに悪化して、愛媛県内の医療が逼迫をし、一般の診療を縮小せざるを得なくなった場合は、仮に愛媛県に緊急事態宣言が出ていなくても、私たち医療従事者が自主的に「医療的な緊急事態宣言」を行うことを視野の中に入れていきます。それは、すなわち県民の皆様は、一般の医療が縮小する、救急患者さんが受け入れられない、予定された手術が延期されるのは受け入れてください、ということの意味するものになります。こういうことは避けていきたいわけですが、まあそれも視野に入れていかなければいけません。

それから、政治的な発言、あるいはどこかの政党に偏った発言ではなくて、あくまでも医療従事者としての意見、個人的な見解ですけれども、重症者以外の人は自宅療養にという方針の大きな変更をされたことによって、状況は大きく変わってくると思います。総理は、オリンピックの開催の前提として、国民の安心・安全が確保されることが必要条件である、大前提であると述べました。しかし、昨日の方針転換でそのロジックが崩れている感じがします。オリンピックで、ステイホームオリンピック、皆さんが家に帰って、静かにオリンピックを見ることで家に帰る効果があるのであれば、それはそれでいいのかもしれませんが、それが逆にオリンピックで気持ちの緩みが発生しているような感じがします。しかも先ほどお話ししたロジックが破綻していることに関して言えば、このままオリンピックをやっているのかとか。あるいはオリンピックは最後までやって、パラリンピックは中止する。これなんかもっと格好悪いと思います。ですから、どこかで、私たちは、非常に重要な決断をしなければいけないのかなというふうなことを思うことがあります。ただ、その一方で、この日のために、本当に努力してきたアスリートたちの気持ちを考えると、断腸の思いがするというのが、今の思いです。

今まで、愛媛県医師会は、こうやって会見することはあまりなかったんですが、これからは、節目、節目にこうやって会見をさせていただきたいというふうに思っています。また、私たち愛媛県医師会は、いつも常に県庁と連携を保って、県民の皆様にとって、一番いい方法を何とか模索していきたいと考えています。また、メディアの皆様方にも、私たちの情報を提供しますので、皆様方も私たちに情報を提供していただきたいとお願いをいたしたいと思っておりますし、私たちの発信している情報をうまく県民の皆様へ届けていただきたいと切にお願い申し上げます。よろしくお願いいたします。

(司会)

それでは質疑応答に入ります。ご質問のある方は挙手をお願いします。マイクをお持ちします。

(朝日新聞)

朝日新聞です。田内先生がおっしゃったことについて、ちょっと質問したいんですけど

ど、若い方でもとても苦しんでらっしゃいますというふうにあるんですけど、なかなかそこら辺のところは伝わってこないのが、危機感が薄いのかなと思うんですけど、もう少し詳しく具体的にこういう症例があったとかありましたら、教えていただけますでしょうか。

(愛媛大学医学部附属病院・田内感染制御部長)

はい、ありがとうございます。

1 つは、前提条件として、インフルエンザだったら、皆さん自宅におられますので、熱が出てしんどそうなのを皆さん方が見る機会があるんですけど、今、新型コロナウイルス感染症というふうに診断されると、宿泊療養施設に来るのか、入院するののかということで、皆さん、どういうふうになっているんだろうということ、普通の人を知る機会って本当はないですね。ただ、若い方が命が取られるかどうかということになると、若い人はそんなに命に関わるようなことはありませんが、熱は普通に出ます。39 度とか 40 度の熱は普通に出るんです。それで、早い人で 2、3 日、1 日で下がる人もいますが、2、3 日、長い人だと 5 日、6 日、1 週間弱ですね。若い人でも、そうやって熱が出る人って、普通におられます。その間は、やっぱり皆さんしんどい思いをする。僕らが、宿泊療養で診ていても、しんどいから、どうにかしてくれと言われますが、そうは言っても熱が出ることに限っては、熱冷ましを使って様子を見るしかないのも、あと数日だから頑張っただけというお話を繰り返しながら、頑張ってくださいというようなことをしているわけです。もちろん、無症状という方もおられます。これは、どの年代でもおられますが、実際、発症して熱が出た人というのは、本当に苦しい思いをしています。それがちょっと、皆様方には伝わりにくいというのも事実としてあるんじゃないかと思っています。

(愛媛新聞)

愛媛新聞です。村上会長にお伺いしたいんですけど、医療的な緊急事態宣言に言及されたんですけど、今後、どの程度の状況になったらというか、今の時点でお考えがあるんでしょうか。

(愛媛県医師会・村上会長)

具体的な数字は持ち合わせてないのですが、今日ご出席の先生方と常に連携して、情報交換しながら、やはり一般の診療を縮小せざるを得ないこと、それは、救急医療や予定手術の延長なんですけれども、そういうことが見えてきた時ですね。それから、スタッフの疲労が限界に近い時などが、具体的に考えられます。ただ、数値として表せと言われると、ちょっと僕も返事に窮してしまうんですが。

(日本経済新聞)

日本経済新聞です。横田先生が言及されたので、横田院長に伺うのがいいかと思ってお聞きしますが、中等症の患者さんの割合というのは、大体どれくらいの割合を占めて、また、中等症の方が重症に移るケースが、大体どれくらいのものなのか。さっき先生、7月以降の数字を具体的に37人、そのうち3人とか、で、お1人中央病院へとか、具体的な数字を挙げられたので、何となく類推はできるんですけど、私のご質問に答えられる範囲で。

(松山赤十字病院・横田院長)

今回の現時点までの数は、まだ3週間になるかならないかのところなんですけど、これは実際、さっき申し上げたように大部分が軽症患者なんです。中等症と言えるのは3人、そのうちの1人が重症で大学に搬送された人がいるというぐらいです。現状はまだ、中ではそういう状況なんですけど。実際、第4波で言いますと、また全然状況が違って、あの時は、実際、日赤でも入院している人の50%が中等症という、そういう状況にはなっていた。ですから、その時々で違うんですけど、第5波の今の状況というのは、まだまだ軽症者のレベルの人が圧倒的に多いんですけど、その数がこれだけ大きくなってくると、ある一定の割合は当然中等症になり、また最初、愛媛大学の杉山先生がおっしゃるように、ある一定の割合で重症になります。大体そういったところです。

(日本経済新聞)

もう1回確認ですが、ご入院なさっているうちの半分ぐらいは中等症ということ。

(松山赤十字病院・横田院長)

その時その時で違いますので、第4波の時はかなり中等症が多くて、半分は中等症だったんですが、今現在は先ほど申し上げましたように、高齢者は1人しか今までなかった。ほとんどが若い人で、多くは軽症だったということ。その中から、それでもやはり中等症が出て、更に重症も出るという、そういうところです。

(日本経済新聞)

もう1問だけすみません。田内部長にお聞きするのがいいかと思うんですが、ワクチンの価値は当然認めるものですし、別にそれを押し下げる趣旨は全然ないんですが、ワクチンをよく理解する意味でお聞きするんですが、重症化とか、発症しない効果は明らかに、この何か月かの経験で認められたと思うんですよ。ちょっと私、1つ疑問というか、専門家の方に伺ってみたかったのが、ワクチンを打った方が人に移す能力ですね、そこが果たしてどうなるんだろうかと。ご自身は発症を抑えられているので、もしかすると感染している意識もないのかもしれませんが、人に移す能力というのは抑えられる

のか、それとも、それはやっぱり相変わらず持ち続けられているのか。ちょっとわかる範囲で。

(愛媛大学医学部附属病院・田内感染制御部長)

そのあたり、最近データが出てきておりまして、感染した人が軽症になりますよね、その人からいわゆる2次感染ですけれども、それは高率に抑えられることができるというのが、最近出ているデータです。この前イスラエルから出ているデータも、2次感染は非常に少ないというデータもありますので、全部一絡げにはできないんですけど、人に感染させる可能性も明らかに減っているというのは事実だと思います。

(テレビ愛媛)

テレビ愛媛です。全体的なことになりますので村上会長にお伺いできればと思います。先ほどの村上会長の方も、今後、医師会も、今回の記者会見の関係者の方も含めて、節目、節目でこういう会見であったり、対策していくことをおっしゃられました。今回、今日ですと2日連続で30人台を超えて、県であったり、知事も第5波の入口に足を踏み入れている状況という中で、今回、このタイミングでこの会見を開かれたりされたことを受けましては、前回の第4波の時とはワクチンの接種状況なども大きく変わってきていると思いますが、会長自身としても第5波を迎える、もう進行形だとしても、どのように対応されていく、これは状況、状況で毎回変わると思うんですけども、今回に限れば、どのような対応が求められるものになるのでしょうか。

(愛媛県医師会・村上会長)

ご質問ありがとうございます。第3波、第4波と結構皆さん、私たちも含めてしんどい思いをして、4月から5月にかけて、第4波を何とか克服したな、これで一息つけるなと思ったら今の状況です。はっきり言って第4波、イギリス型変異株よりも、第5波の今回の、私はもう第5波に既に入っていると思っていますが、この方が大分厳しいという感じがします。だから、毎日、毎日が勝負になっていくから、日々が医療逼迫に近づいていくっていう危機感を持っています。それが、現在の認識なんです。

では、それに対応できる資源というのが、無尽蔵にあるかということ、それはないわけですが、今いる人たち、スタッフ、今ある資源で、一生懸命やりくりするしかないということですが、やりくりの仕方に工夫があると思います。無症状できちっと約束を守れる人は自宅療養。そしてそれを上手にモニタリングしていく、日々の健康観察をして。少しでも怪しい人は宿泊療養施設を精一杯活用し、もうちょっと危ない人は入院医療にアクセスをしていくと。入院医療のところでは渋滞が起こってきます。できるだけ渋滞を控えて早く解消するために、後方連携施設というのを、わざわざ作って、愛媛県内で54病院だったか、手を挙げてくれました。民間病院もたくさん含まれています。そういう

のを精一杯活用して、できるだけ患者さんの流れをスムーズに、流れるようにしていこうというふうに工夫していくということです。それが、今度の第5波に向けての、私たちの心構えというか体制整備になります。

(テレビ愛媛)

ありがとうございます。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

先ほどご質問あったところで、ちょっと関連することですけれども、感染の基本というのは人に移していくということで、そして、先ほど若い人の話がありましたけれども、若い人はやっぱり行動が広く、感染の機会が多いです。家に持って帰ってきて、家庭内の感染につながる。それから、アルバイト行って、また広がる可能性があります。仕事をされている方は、お仕事で県外に出張に行かなければならない。そこで、どうしても、もらっちゃう可能性があり、家族内で広がる。そういう人たちが、本当は症状がないけど感染力を持っているということです。だから、今回のデルタ株というのは、従来型よりも約2倍の感染力があります。第4波の時の英国株、アルファ型よりも1.5倍感染力が強いですから、その分、そういうことをしっかり皆さんが知っておいていただいて、行動いただくというのが大事だと思います。

先ほど田内部長もおっしゃいましたけれども、なかなかそういうメッセージというのは伝わりにくい状況にはなっていますが、しかしながら、だからといって、あきらめて、放っておくというのでは全然ダメで、今一度、ここでしっかり皆さんよろしくお願ひしますと、このことをどうぞ知っておいてくださいということが大事だと思います。

そういうことで、愛媛県は、先ほど村上会長もおっしゃいましたように、なるべく後手にならずに、先手、先手で対策をしていきたいと思っています。今も47都道府県では人口当たりの発症者数は、まだ決して高い方ではないですが、ちょっと間違うと一気に増えますので、逼迫とか崩壊する前に、先手、先手で今頑張らないと、崩壊してからではアウトなわけですから、そういう意味で、皆さんと一緒に頑張らなければならないと思っている次第です。

(南海放送)

南海放送です。田内先生にお伺いしたいのですが、4月下旬の一番最初の会見の時に、イギリス株での、宿泊療養施設の中で容体が急変して、緊急搬送する事例がかなり増えているという話があったかと思うんですけど、今回のデルタ株についてはどのように。

(愛媛大学医学部附属病院・田内感染制御部長)

今回は、まだ時点が全然違うので、また県立中央病院とか日赤病院とかにベッドに空

きがあります。ですから、そこまでひどくなる前に（入院を）お願いできる状況です。前回は、一杯一杯だったので、宿泊療養施設でなるべく留め置いて、ベッドが空くのを待っている状態で急変ということがありましたが、現在、この時点では、まだ急変というのはありません。（入院を）お願いしたことはあります。ただ、今すぐにとってくださいというのじゃなくて、ちょっと相談しながら病院にお願いするというのではありません。現在の逼迫の状況はあの時とは違って、まだ大丈夫です。ただ、まだ大丈夫だからというのがメッセージではなくて、今、毎日 30 人出たら 10 日で 300 人ですから、そうなるとうどうにもならないかなみたいな気がしています。その中から重症者も出てきますので。今の状況はそういう状況です。

（司会）

時間も過ぎましたので、これで会見は閉じたいと思います。ありがとうございます。